

一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童の育成

— C&Sによる客観的児童理解に基づいた「1人1台端末併用学級活動プログラム」 の作成・活用を通して —

長期研修員 石井 千恵美

《研究の概要》

本研究では、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童の育成のために、教師に向けた「1人1台端末併用学級活動プログラム」を作成し、活用を図った。「1人1台端末併用学級活動プログラム」は、事前の活動→本時の活動→事後の活動で活用した。教師が、C&S質問紙「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」による客観的児童理解に基づき、1人1台端末を併用したソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）と構成的グループエンカウンター（以下、SGE）を軸としたプログラムを実践したことで、規律あるあたたかい雰囲気を育むことができ、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童を育成できることを明らかにした。

キーワード 【教育相談 C&S 客観的児童理解 よさを認め、支え合う 1人1台

群馬県総合教育センター

分類記号：F09-01 令和4年度 279集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Google フォームは、Google LLCの商標又は登録商標です。

なお、本文中には™マーク、®マークは明記していません。

I 主題設定の理由

文部科学省の「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、小・中学校における不登校児童生徒数は9年連続増加している。前年度からは、24.9%の増加である。第3期群馬県教育振興基本計画によると不登校児童生徒数は、「全国同様、高水準で推移しており、憂慮すべき状況となっています。特に小学校の不登校児童数が大きく増加し、不登校児童在籍の学校数の割合も増加しています。」とある。新型コロナウイルス感染症を始めとする生活環境の変化による生活リズムの乱れや対面・ペア・グループ学習が制限されるなど、児童は、互いのよさを認め、支え合う人間関係を築くことが難しく、学校生活に楽しみや意義を見いだせず、登校する意欲がわからないことが一因として挙げられている。また、文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」（平成24年12月）では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒は、6.5%と報告されている。文部科学省の「生徒指導提要」（令和4年12月改訂）では、「発達障害のある児童生徒の場合は、不安や悩みを身近な人に伝えて理解してもらうことや、課題解決のために援助を求めることが苦手なところがあります。」と記されている。また、研究協力校（以下、協力校）の教師への聞き取り調査から、「自分の思いを相手にうまく伝えられない」「相手の立場になり考えられない」児童が増えているように感じるとの回答を得た。そのため、学級での人間関係づくりに苦慮する場面が見受けられる。県の新・総合計画の「誰一人取り残さない」教育を実現するためにも、様々な配慮が必要な児童生徒を意識した、互いのよさを認め、支え合う学級づくりが求められる。

これらのことから、教師の日常観察と共に質問紙等による客観的児童理解が必要であり、客観的児童理解に基づいた援助・支援についても1人1台端末を活用することが有効であると考えられる。文部科学省の令和3年1月の中央教育審議会答申では、「デジタルかアナログか、（中略）どちらかだけを選ぶのではなく（中略）、発達の段階や学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせ生かしていくという考え方に立つべきである。」とある。児童の実態に合わせ、1人1台端末のよさを組み合わせ有効に活用することが重要である。

そこで、本研究では、C&Sによる客観的児童理解に基づき、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童を育成するために、教師が「1人1台端末併用学級活動プログラム」を活用した学級づくりを行う。事前の活動でC&Sによる実態に基づいたSSTを行い、集団生活スキルと対人関係スキルを高め、本時の活動で実態に基づいたSGEを関連付けて行い、教師がフィードバックしたり、児童同士がよさを認め合ったりすることで、規律あるあたたかい雰囲気や育むことができると考えられる。事後の活動では、本時の活動を継続して行い、定着を図りたい。一連の活動を通して、児童が思いや考えを表出・発信しやすい1人1台端末を併用することで、思いや考えを共有し、多様な考えに触れ、多面的に捉えることができるようになる。また、振り返りシートを端末に蓄積することで、児童の思考の過程をその場で振り返ることができる。さらに、教師や他児童との双方向のやり取りをリアルタイムで行い、意見交換が行える。教師は、その場で児童の考えを把握し、支援に生かすことができる。このプログラムを作成し、教師が活用することで、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童を育成することにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

C&Sによる客観的児童理解に基づき、「1人1台端末併用学級活動プログラム」を作成し、教師が活用することは、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童の育成のために有効であることを明らかにする。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 研究上のキーワードの定義

① 一人一人が互いのよさを認め、支え合うとは

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成29年7月）に、「学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること。」とある。児童にとって学級は、学習活動をはじめ、多くの教育活動を行う上での基盤となる。本研究では、一人一人の個性を尊重し、自分とは異なる考え方や個性も受け入れることを互いのよさを認めると捉える。さらに、個と個、個と集団の中で互いのよさを生かし、課題や問題に協働して取り組み、一つの目標を達成する喜びを感じたり、自分から友達に働き掛けたり、関わったりできることを支え合うと捉える。

② 規律あるあたたかい雰囲気とは

児童の学びに必要な手段の一つとなった1人1台端末を人間関係づくりにおいても活用し、実態に基づいたSSTを定着させることで、きまりや行動の仕方等の集団生活スキルと時と場に応じて自ら行動できる対人関係スキルを身に付けることができると考える。また、実態に基づいたSGEに取り組み、教師がフィードバックしたり児童同士が認め合ったりすることができる。実態に基づいたSST及びSGEを関連付けて行うことで、規律あるあたたかい雰囲気を育むことができると考える。事後の活動では、本時の活動で得た内容を生かしたり、共有したりする活動を継続して行い、定着を図りたい。これらのことを通して、一人一人が互いのよさを認め、支え合うことができる児童が育成されると考える。

③ C&Sによる客観的児童理解に基づいたとは

小学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）には、「学級経営を行う上で最も重要なことは学級の児童一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童理解である。」とある。教師は、日常から児童理解に努めているが、教師の主観的な児童理解と共に、質問紙やアンケート等による客観的児童理解が有効である。本研究では、C&S質問紙「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」に基づいた客観的児童理解を行うこととする。

④ 1人1台端末併用とは

本研究では、児童が比較的抵抗なく自分の思いを表出・発信できる1人1台端末を用いる。教師と児童、児童同士での双方向のやり取りが可能になる。さらに、児童の考えの共有や蓄積がよりスムーズに行えたり、教師の授業準備が簡略化されたりする。文部科学省の「教育の情報化に関する手引」（令和2年6月追補版）には、「ICTはマストアイテム」との記述があることから、併用していくことが望ましいと考える。しかし、1人1台端末を介したやり取りは、細かいニュアンスまで伝えることが難しい面もあるため、発信する側も受け取る側も普段より大袈裟なアクションを取る等、非言語コミュニケーションを意図的に補い合うことを意識する必要がある。また、本プログラムでは、道具を使ったり、スキンシップを伴ったりする活動は対面で行い、児童の緊張をほぐし、自己開示しやすい雰囲気を作り、1人1台端末と併用することを意識する。

(2) 手立ての説明

一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童を育成するために、C&Sによる客観的児童理解を行い、教師の日常観察や協力校で毎月行っている「いじめ把握アンケート」、更に「ソーシャルスキル尺度調査」を加え、確かな児童理解を行い、集団と個の実態を把握する。そして、実態に基づいた「1人1台端末併用学級活動プログラム」を活用する。

2 教材の概要

本研究では、教師に向けた援助・支援ツール「1人1台端末併用学級活動プログラム」を電子データで作成し、活用する。

(1) 「C&Sによる客観的児童理解」について

C&Sとは「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する」質問紙である。「自己肯定感」を縦軸に「学級の雰囲気」を横軸に取り一人一人をプロットで表し、散布図で集団と個の実態を同時に把握できる。また、学級の中で個々の児童がどのような状態かを相対的に見取ることができる。プロットの分布から6つのタイプ（6分布）に分類され、予想される学級の実態を示している。教師の日常観察だけでは把握

しきれない実態を、C&Sによる客観的児童理解に「いじめ把握アンケート」、「ソーシャルスキル尺度調査」等を加え、児童を多面的に見ることで確かな児童理解ができ、学級の実態をよりの確に把握することができる。C&Sは、本センターのWebページからGoogle フォームで回答でき、結果もすぐに得られるので迅速な対応が行える。

(2) 「1人1台端末併用学級活動プログラム」について (図1)

本プログラムは、C&Sによる客観的児童理解に基づき、6分布に対応した集団と個の実態に基づいたSSTとSGEを関連付け、1人1台端末(以下、端末)を併用した事前、本時、事後の活動の具体案を提案する。まずC&Sを実施し集団と個の客観的児童理解を行い、次に、実態に基づいたプログラムを実践する。事前の活動では、実態に基づいたSSTを行う。モデリング動画の視聴やロールプレイ等を録画する場面で端末を活用することで、具体的に違いを捉えたり、正しいスキルを身に付けたりすることができる

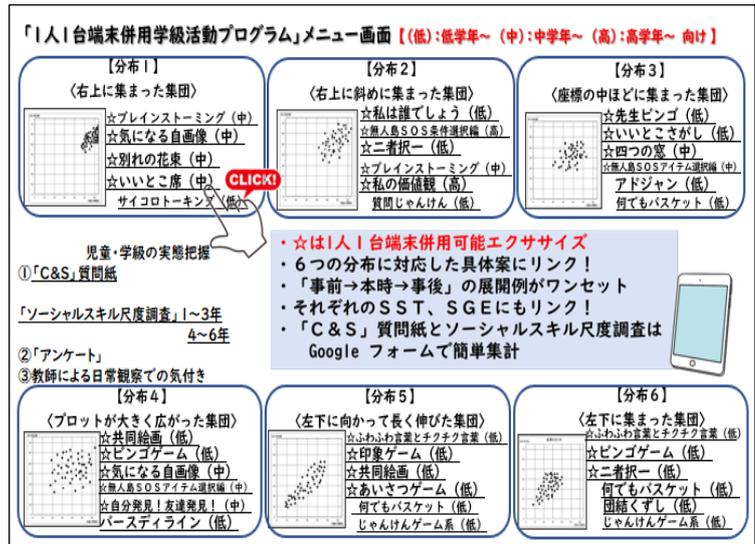


図1 「1人1台端末併用学級活動プログラム」メニュー画面

と考える。本時の活動は、実態に基づいたSGEの展開例等を活用する。端末は、言語活動が多い場面で併用することで、児童が考えを表出・発信しやすくなると考える。振り返りでは、考えの共有や蓄積、双方向のやり取りが行える。事後の活動は、本時の内容を継続して行い、定着を図る。端末には、自己評価、相互評価、活動の振り返りを入力することで、援助・支援することができるようにする。

3 研究構想図



IV 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

対象 【分布】	本時：学活	実践① 事前→本時→事後	実践② 事前→本時→事後	実践③ 事前→本時→事後	備考
第1学年16名【分布5】		10月4日（本時）	10月18日（本時）	11月1日（本時）	資料編別紙①参照
第4学年30名【分布3】		10月18日（本時）	11月2日（本時）	11月16日（本時）	別表参照
第6学年30名【分布2】		10月7日（本時）	10月21日（本時）	11月4日（本時）	資料編別紙②参照

※C&Sの客観的児童理解を基に、実践前にアンケートを行い、実態をよりの確に把握する。

※事前の活動を朝の短学活で3日間程度、事後の活動を帰りの学活で5日間程度行い、振り返りを行う。

※6月と実践終了後にC&Sとソーシャルスキル尺度調査をGoogleフォームで行う。

別表 第4学年【分布3（座標の中ほどに集まった集団）】

実践①における目指す児童の姿		
・考えを表現したり友達の考えを認めたりできるように、適切な質問の仕方を身に付けることができる。		
時間	●ねらい ○学習活動 [☆]：ICT活用	目指す児童の姿
実践前	●生活を振り返り、自ら課題を見付け、意識を高められるようにする。 ○生活を振り返り、端末からアンケートに回答する。[☆]	・自分の生活を進んで、振り返ろうとしている。（アンケート）【主体態】
事前の活動	「上手な質問の仕方」（SST） ●上手な質問の仕方を身に付け、相手によい気持ちで協力してもらえようにする。 ○上手な質問の仕方とそうではない質問の仕方の動画を視聴し、上手な質問の仕方のポイントを考える。[☆] ○自分たちで考えた上手な質問の仕方のポイントを意識し、練習をすることで、上手な質問の仕方を身に付ける。	・上手な質問の仕方とそうではない質問の仕方の動画を視聴し、上手な質問のポイントを考えようとしている。（行動観察、発言）【主体態】 ・上手な質問の仕方を身に付けている。（行動観察、発言）【知・技】
本時の活動	「無人島SOS（アイテム選択編）」（SGE） ●いろいろなものの見方や考え方に共通点や相違点があることに気付き、それぞれの違いを認め合うことができる。 ○アンケート結果から課題を見付け、意識をもつ。 ○シンキングツールで、個人の考えを整理する。[☆] ○端末1台を使い、班で話し合い、まとめ、共有する。[☆] ○アンケート機能に、振り返りを入力し、共有する。[☆]	・アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもとうとしている。（行動観察、発言）【主体態】 ・自分の考えを伝え、友達の考えを認めながら聞こうとしている。（行動観察、発言）【主体態】
事後の活動	「インタビューにチャレンジ」（定着） ●質問のポイントを意識しインタビューをすることができる。 ○項目に沿ってインタビューをしたり、生活の中で質問の仕方のポイントを意識して質問したりする。 ○活動を振り返り、端末に、ポイントごとに自己評価を入力し、相互評価や振り返りも入力し、共有する。[☆]	・学校生活で、質問の仕方を意識して実践している。（行動観察、振り返りシート）【思・判・表】 ・授業を振り返り、質問の仕方を意識しようとしている。（行動観察、発言、振り返りシート）【主体態】
実践②における目指す児童の姿		
・お互いのよさ伝え合うことで、受容的な関わりができる。		
時間	●ねらい ○学習活動 [☆]：ICT活用	目指す児童の姿
事前	「あたたかい言葉シャワー」（SST） ●あたたかい言葉を知り、あたたかい言葉を掛けられる体験	・あたたかい言葉掛けの仕方とそうではない動画を視聴し、あたたかい言葉掛けのポイ

の活動	<p>を通し、よさを味わうことができる。</p> <p>○あたたかい言葉掛けの仕方とそうではない動画を視聴し、あたたかい言葉掛けの仕方のポイントを考える。[☆]</p> <p>○自分たちで考えたあたたかい言葉掛けの仕方のポイントを意識し、練習することで、あたたかい言葉掛けの仕方を身に付ける。</p>	<p>ントを考えようとしている。</p> <p>(発言) 【主体態】</p> <p>・あたたかい言葉掛けの仕方を身に付けている。(行動観察、発言) 【知・技】</p>
本時の活動	<p>「いいところさがし」(SGE)</p> <p>●友達に受容される体験を通して自己肯定感を高め、友達のよいところを探すことで、他者を認められるようにする。</p> <p>○アンケート結果から課題を見付け、意識をもつ。</p> <p>○友達のよいところを写真入りのメッセージで送り、対面でも理由を伝える。</p> <p>○アンケート機能に、振り返りを入力し、共有する。[☆]</p>	<p>・アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもとうとしている。</p> <p>(行動観察、発言) 【主体態】</p> <p>・友達のよいところを探し、相手を意識して伝えようとしている。(行動観察、発言、ワークシート) 【主体態】</p>
事後の活動	<p>「目指せ!あたたかい言葉の達人」(定着)</p> <p>●あたたかい言葉を掛けるのと同時に、あたたかい言葉を掛けられたら「ありがとう」等と返したり、「ほめられ上手」も意識させたりする。</p> <p>○あたたかい言葉を掛けたり、掛けられたりした際、「ありがとう」等と返すことを意識して生活する。</p> <p>○活動を振り返り、端末に、ポイントごとに自己評価を入力し、相互評価や振り返りも入力し、共有する。[☆]</p>	<p>・授業中や休み時間等、あたたかい言葉を相手に伝えること意識して実践している。</p> <p>(行動観察、発言、振り返りシート)</p> <p>【思・判・表】</p> <p>・授業を振り返り、友達のよい言動を褒めようとしている。(行動観察、発言、振り返りシート) 【主体態】</p>
<p>実践③における目指す児童の姿</p> <p>・相手の気持ちを考え、寄り添った言葉掛けができる。</p>		
時間	●ねらい ○学習活動 [☆] : ICT活用	目指す児童の姿
事前の活動	<p>「気持ちを分かって働きかける」(SST)</p> <p>●共感について理解し、共感されたりしたりする体験を通して、よさを理解することができる。</p> <p>○共感している動画とそうではない動画を視聴し、共感の仕方のポイントを考える。[☆]</p> <p>○表情のスライドや教師の表情等から非言語的(目や口の形、身振り等)共感の仕方を知り、まねをする。[☆]</p> <p>○自分たちで考えた共感の仕方のポイントを意識し、練習することで、共感の仕方を身に付ける。</p>	<p>・上手な共感の仕方とそうではない動画を視聴し、共感のポイントを考えようとしている。[☆] (発言) 【主体態】</p> <p>・非言語的(目や口の形、身振り等)共感と言語的共感の仕方を身に付けている。</p> <p>(行動観察、発言) 【知・技】</p>
本時の活動	<p>「四つの窓」(SGE)</p> <p>●自分と似た見方や感じ方の友達を見付け、考えを友達に伝えたり、友達の考えを共感して聞いたりすることで、互いに自分と似た見方、感じ方を認め合えるようにする。</p> <p>○アンケート結果から課題を見付け、意識をもつ。</p> <p>○複数のテーマについて、4つの選択肢から自分に合うものを1つ選び、端末に理由も入力する。[☆]</p> <p>○項目ごとに同じ選択肢を選んだ児童と理由を伝え合う。</p> <p>○アンケート機能に、振り返りを入力し、共有する。[☆]</p>	<p>・アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもとうとしている。</p> <p>(行動観察、発言) 【主体態】</p> <p>・自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりすることで、互いのことを知ろうとしている。(行動観察、発言、ワークシート) 【主体態】</p>
事後	<p>「共感して伝えよう」(定着)</p> <p>●共感のポイントを意識して、自分の気持ちを伝えることが</p>	<p>・共感の仕方のポイントを意識し、伝えようとしている。(行動観察、発言、振り返り</p>

の活動	<p>できる。</p> <p>○共感の仕方のポイントを使い気持ちを伝えるようにする。</p> <p>○活動を振り返り、端末にポイントごとに自己評価を入力し、相互評価や振り返りも入力し、共有する。[☆]</p>	<p>シート)【思・判・表】</p> <p>・共感しながら、気持ちを伝えようとしている。(行動観察、発言、振り返りシート)</p> <p>【主体態】</p>
-----	--	--

2 検証計画

検証	児童	教師
視点1	1人1台端末を併用した実態に基づいたSST及びSGEの実践は、規律あるあたたかい雰囲気を育むために有効であったか。また、1人1台端末を併用した実態に基づいた事後の活動を継続したことは、規律あるあたたかい雰囲気を定着させるために有効であったか。	校内研修で提示した資料は、C&Sによる客観的児童理解に基づいた「1人1台端末併用学級活動プログラム」の必要性について共通理解を図るために有効であったか。
方法	アンケート、聞き取り	アンケート、聞き取り
視点2	事前の活動で実態に基づいたSST、本時の活動で実態に基づいたSGEを関連付け、事後の活動で継続して取り組み、定着を図ることを1人1台端末を併用して取り組んだことは、児童が互いのよさを認め、支え合うために有効であったか。	「1人1台端末併用学級活動プログラム」の構成は、互いのよさを認め、支え合う児童の育成に有効であったか。
方法	C&S、ソーシャルスキル尺度調査、1人1台端末への入力、抽出児の変容、本時の活動及び事後の活動の振り返り	学級活動等に関わった教師及び参観をした教師へのアンケート、聞き取り

3 実践

(1) C&Sによる客観的児童理解の実施

校内研修でC&Sによる客観的児童理解の共通理解を図った。教師の見取りと異なる結果が出たり、気に掛ける児童が分かたりしたため、教師は、客観的児童理解の必要性を感じる事ができた。

(2) 「1人1台端末併用学級活動プログラム」の実践

第1学年、第4学年、第6学年共に実態に基づいた「1人1台端末併用学級活動プログラム」を各学級、3回ずつ実践した。第1学年、第6学年の実践の詳細については、資料編別紙③、④を参照。

【第4学年の実践】

① 事前の活動(実態に基づいたSSTを行い、スキルを学習し、規律ある雰囲気を育む)

主な学習活動【SST】	児童の様子
<p>(ア) よい例、悪い例の動画を視聴する。(NHK for SchoolやYouTubeの活用や教師の自作教材等。)</p> <p>(イ) よい例の動画を参考に、スキルのポイントを考える(図2)。</p> <p>(ウ) 考えたスキルのポイントを意識して、ロールプレイをペアやグループ等で行う。</p> <p>(エ) 上手にできている友達のロールプレイを見て、正しいスキルのイメージをもつ。</p>	<p>・動画を視聴して、スキルのポイントを考えて。自分たちで考えたポイントなのでロールプレイでは、ポイントを意識したり、更に自分の言葉で伝えようとしていたりしていた(図3)。</p> <p>上手にできているペアを録画し、共有したことでイメージをもてた。</p>

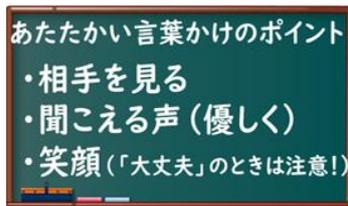
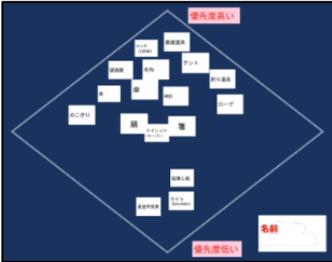
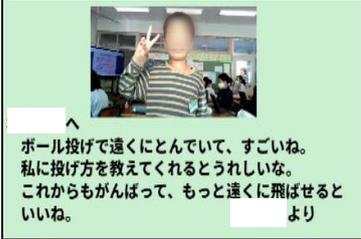


図2 児童が考えたスキルのポイント



図3 ロールプレイの様子

② 本時の活動（実態に基づいたSGEを行い、規律あるあたたかい雰囲気を育む）

	主な学習活動 【SGE】	児童の様子
実践 ①	<p>「無人島SOS（アイテム選択編）」</p> <p>(ア) アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもつ。</p> <p>(イ) 「無人島SOS」のルールと進め方を知る。</p> <p>(ウ) 端末のダイヤモンドランキングを使い、個人で優先順位を付ける（図4）。</p> <p>(エ) 意見を共有し上手な質問の仕方を意識して話し合い、意見を決め、座標軸にまとめる。</p> <p>(オ) 振り返りをアンケート機能に入力し、共有する。</p>  <p style="text-align: center;">図4 児童の端末の様子</p>	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果を知ること、課題を自分や学級のこととして捉えられた。 ルールと進め方を大型モニターで確認したり、教師の手本を見たりしたことで、初めての活動にも抵抗なく取り組めた。 班で1台の端末を使い、「上手な質問の仕方」を意識し、考えをまとめたので、対面での活動も大切にできた。（図5）。 「上手に質問してもらって答えやすかったから、質問の仕方を使って質問したい」という感想が見られた。  <p style="text-align: center;">図5 班での話し合い</p>
実践 ②	<p>「いいところさがし」</p> <p>(ア) アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもつ。</p> <p>(イ) 「いいところさがし」のルールと進め方を理解する。</p> <p>(ウ) 友達のよいところを写真に撮り、メッセージと共に送信する（図6）。</p> <p>あたたかい言葉掛けを意識し対面で伝え合う。</p> <p>(エ) 振り返りをアンケート機能に入力し共有する。</p>  <p style="text-align: center;">図6 いいところカード</p>	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果を知ること、課題を自分や学級のこととして捉えられた。 ルールと進め方を大型モニターで確認したり、教師の手本を見たりしたことで、初めての活動にも抵抗なく取り組めた。 よいところを伝えるときに写真を入れたので、親近感をもったり、新たな面を見付けたりできた。 事前の活動で関連したSSTを行ったことで、友達の内面のよさにも気付くことができた。 「いいところを伝えてもらって自信がついたし、心がぼかぼかしたから、友達のよいところを見付けて、たくさん伝えたい」という感想が見られた。
実践 ③	<p>「四つの窓」</p> <p>(ア) アンケート結果から課題を見付け、問題意識をもつ。</p> <p>(イ) 「四つの窓」のルールと進め方を知る。</p> <p>(ウ) テーマについて4つの選択肢から自分に合うものを1つ選び、端末に理由と共に入力する（図7）。</p> <p>(エ) 共感の仕方を意識し、対面で理由を伝え合う。</p> <p>(オ) 振り返りをアンケート機能に入力し共有する。</p>  <p style="text-align: center;">図7 児童が端末に入力したカード</p>	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果を知ること、課題を自分や学級のこととして捉えられた。 ルールと進め方を大型モニターで確認したり、教師の手本を見たりしたことで、初めての活動にも抵抗なく取り組めた。 共感のポイントを確認し、共感できている児童の手本を見たことで、共感を意識できた（図8）。 「話をしたら、私も同じだよと言ってくれたので、安心した。私も共感をしながら話を聞きたい」という感想が見られた。  <p style="text-align: center;">図8 同じ窓で伝え合う児童</p>

③ 事後の活動（本時で学習した内容を継続して行い、定着を図る）

主な学習活動 【定着】	児童の様子
-------------	-------

<p>(i) スキルのポイントを意識して、生活する。</p> <p>(ii) 活動を振り返り、端末にポイントごとに自己評価を入力し、相互評価や振り返りも入力し、共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ポイントを意識したり、声を掛け合ったりして、取り組んだ。 ・相互評価で友達から認められ、励みになった。
---	---

V 研究の成果と考察

1 1人1台端末を併用した実態に基づいたSST及びSGEの実践は、規律あるあたたかい雰囲気を育むために有効であったか。また、1人1台端末を併用した実態に基づいた事後の活動を継続したことは、規律あるあたたかい雰囲気を定着させるために有効であったか。

(1) 1人1台端末を併用した実態に基づいたSST及びSGEの結果

① 事前の活動の実践から

事前の活動では、C&Sによる客観的児童理解に基づき児童に身に付けさせたいSSTを行った。身に付けさせたいスキルのポイントを押さえるために、NHK for SchoolやYouTube等を活用し、モデリング動画の視聴を行った。状況設定も分かりやすく、児童は、動画を視聴しながら、「この話の聞き方は駄目だよ」「友達がかawaiiそう」等と呟いていた。よい例を視聴したときには、「先生が言っていたことと同じだ」「私は、できていないかもしれない」等、自分の生活を振り返る発言が聞かれた。その後、身に付けさせたいスキルのポイントを考えるときは、動画を参考にして自分たちでポイントを考えることができた。「あたたかい言葉シャワー」のロールプレイは、最初は、戸惑っていたが、友達から認められたり励まされたりしたので、安心して話せ、自信をもって取り組んでいた。端末で上手にできたペアを録画し、その場で全員で共有できたことは、端末を活用することのよさである。

第4学年の実践①では、「上手な質問の仕方」を考えた。児童からは、「相手の都合を聞く、聞きたいことを決めて、理由も聞く、お礼を言う」等のポイントが挙げられた。実践②では、「あたたかい言葉シャワー」を行い、「あたたかい言葉掛けの仕方」を考えた。「笑顔、相手を見る、聞こえる声」というポイントが挙げられた。「あたたかい言葉シャワー」のロールプレイを行う中で、児童は、あたたかい言葉には、褒める以外にも認める、励ます、感謝する、心配する等の種類があることに気付くことができた。また、「大丈夫」という言葉には、励ます意味と心配する意味があるので、言い方や表情に気を付けることが大切だということも考えることができた。友達のよいところを褒める活動では、「Aくんは、いつも元気でいいね。授業を盛り上げてくれて助かるよ」や「Bさんは、授業に集中していてすごいね。私もBさんみたいにがんばるね」等、内面のよさに気付けた児童を録画し、共有することで具体的なイメージをもつことができた。実践③では、「気持ちを分かち合おう」を行い、「共感の仕方」を考えた。共感という考え方を知らせるために、動画視聴に加え、喜怒哀楽等の表情のスライドを見せ、目や眉、口の形に注目させ、どのような気持ちかを考えさせた。実際にスライドの表情のまねをさせ、気持ちを推測させたことで、表情や動作といった非言語面からも共感できることを理解していた。

② 児童の振り返りから

「聞きたいことがあるとき、相手の都合を聞いてから質問したい」「あたたかい言葉を相手を見て、笑顔で言えるようになりたい」「顔の表情から友達の気持ちを考えることができた」「『なるほど。私も○○だよ』と言ってもらえて嬉しかったから、ぼくも共感できるようになりたい」という感想が見られた。いずれの実践も自分のことだけでなく、相手のことを認めている様子が見られた。

③ 考察

事前の活動で、動画を視聴し、よい例とそうではない例を比較することで、自分たちでスキルのポイントを考えることができた。自分たちで考えたポイントなので、意識して取り組むことができた。SSTで基本的な関わり方を学習することで、困ったことがあっても、「授業でやったから言っても大丈夫だよ」という安心感が生まれたと考えられる。担任にトラブルの報告があっても、「○○のときは、どうするといいかな」と投げ掛けると、「そうだった」とSSTで学んだことを使い、自分

たちで解決しようとする姿が見られた。このように、自分たちで人と関わるポイントを主体的に考え、関わろうとする姿から、事前の活動におけるSSTの実践は、規律ある雰囲気を育むために有効であったと考えられる。

④ 本時の活動の実践から

本時の活動では、C&Sによる客観的児童理解に基づいたSGEを行った。教師がよい点や改善点をフィードバックしたり、話し合う活動において児童同士で認め合う活動を取り入れたりした。SGEを行う前に事前の活動で関連付いたSSTを行い、規律ある雰囲気が育まれているので、互いのよさを認め合える雰囲気があり、SGEの活動の内容を深めることができた。事前に行ったアンケート結果を提示することで、児童は課題を自分のことや学級の課題として捉えることができた。また、本時の活動では、事前の活動で決めたSSTのポイントを提示したり、意識させたりすることで、めあてを意識させることができた。振り返りでは、アンケート機能を活用することで、授業の始めに提示したアンケート結果との比較ができ、児童自身も考えの変容を見取ることができた。また、振り返りを共有することができたので、自分では気付かなかった考えにも触れることができ、新しい気付きを得ることができたと考えられる。

第4学年の実践①は、「無人島SOS（アイテム選択編）」を行った。端末を使い、個人の考えを整理した後、班で話し合い、考えをまとめた。端末を使い、考えを共有したことで、友達の意見を知り、互いの意見を認め合いながら、話し合いをすることができた。班での話し合いは、対面での活動を大切にするために、端末1台を使い対面で行った。その際、意見を伝えるだけでなく、友達に質問するときには、「上手な質問の仕方」を意識し、質問をすることができていた。また、友達の意見を受容的に聞くこともできていた。実践②は、「いいところさがし」を行った。今回は、友達のよいところをメッセージと共に端末で写真を撮り、送り合う活動を行った。事前の活動で、「あたたかい言葉掛け」の種類に気付くことができていたので、友達のよいところも、外面だけではなく内面に关わるものも多く見られた。端末で送り合った後に、対面で直接伝えさせた。伝えるときには、「あたたかい言葉掛けの仕方」を意識させたので、明るい表情で活動する様子が見られた。また、伝えることが苦手な児童は、端末に写真やメッセージがあるので安心感をもって伝える様子が見られた。端末を使い、送り合ったことで、「いつでも見られて嬉しい」という呟きも聞かれた。担任は、端末を介して児童のやり取りをその場で把握することができる。そのため、場に応じた支援を行いやすく、気になる児童に意図的に言葉を掛けることができた。実践③は、共感することをめあてに「四つの窓」を行った。質問に対して、同じ選択肢を選んだ仲間理由を伝え合うので、安心して話すことができ、共感もしやすかった。共感をどのように表現してよいのか迷う児童がいたが、児童同士で「私と同じだね」「『いいね!』と言うといいよ」等、共感の言葉を教え合う場面が見られた。

⑤ 児童の振り返りから

「友達が上手に質問してくれると話しやすいので、私も上手に質問したい。聞きたいことを決めてから話すのは、難しいけど、自分の考えをもう1度振り返ることができていい」「あたたかい言葉を掛けてもらってぼかぼかになったので、授業以外でも友達にあたたかい言葉を掛けたい」「共感してもらってよい気持ちになったし、共感してもよい気持ちになった」と、どの実践でも前向きな感想が見られた。このように、互いのよさを認められたと捉えられる児童の振り返りが多数見られた。

⑥ 考察

本時の活動で端末を併用し、言語活動が比較的多いSGEを行い、フィードバックし、よさを認め合う活動を行った。端末に自分の考えを入力し整理したり、正解が決まっていない内容を話し合わせたりしたことで、普段、意見を言わない児童も、否定されず、認めてもらえる安心感から意見を出すことができた。自分の考えを自由に言え、かつ、それぞれに考え方が違うのだ、ということを知ることによって、友達を認め大切にしようとする心が育った。SSTで対人関係のスキルを

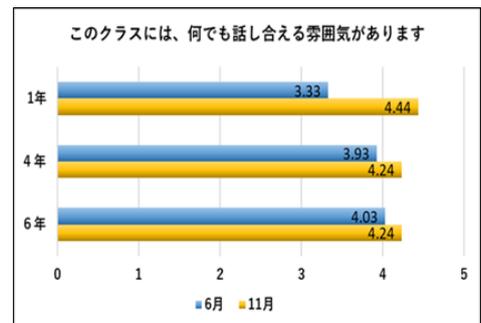


図9 実践前後のC&S「学級の雰囲気」設問5比較

学習して、規律ある雰囲気が出ていたので、SGEの活動では、安心して友達のよさ認め、伝えることができた。また、学校生活では、友達を認めたり、褒めたりしたいと思う場面があっても、言葉にして伝えることができない児童も、機会を設けたことで友達にあたたかい言葉を掛けることができた。担任は、児童の意見を端末を介して、その場で把握できるので、個や場に応じた支援を行ったり、気になる児童へ適切な言葉掛けを行ったりすることができた。C&Sの「このクラスには、何でも話せる雰囲気があります」の結果は、第1学年は、5ポイント中3.33から4.44に高まった。第4、6学年においても平均値の向上が見られたことから、児童に、認め合えるあたたかい雰囲気が育ってきたため、意見を伝えることに抵抗がなくなってきた児童が増えていると考えられる（前ページ図9）。これらのことから、本時の活動で1人1台端末を併用し実態に基づいたSGEを行ったことは、教師がフィードバックしたり、児童同士が認め合えたりしたので、あたたかい雰囲気を育むために有効であった。

(2) 1人1台端末を併用した実態に基づいた事後の活動における定着の結果

① 事後の活動の実践から

事後の活動では、事前の活動及び本時の活動の学習内容を生かしたり共有したりすることで、活動の定着を図った。端末で事後の活動がチェックできるように振り返りシートを端末に配信した。また、スキルのポイントを掲示しておいたので、児童は意識して活動を行うことができた。事後の活動では、関わりの少ない児童同士が関わられるように言葉掛けをしたり、ペアを決めたりしたので、「あまり話したことのなかった友達と話せてよかった。友達の好きなことを知ることができてよかったし、私が気付かなかったよいところを教えてもらえて嬉しかった」等、新しい友達との関わりも、もつことができた。

② 振り返りから

「同じクラスなので、仲がよかったと思っていたけど、質問したりされたりして、お互いのことを知ることができたから、もっと仲が深まった」「あたたかい言葉掛けのポイントを使って話すと、相手も自分も気持ちがあたたかくなるのが分かったから、これからはあたたかい言葉をたくさん使いたい」「友達の顔を見ると、なんとなく気持ちが分かったし、『いいね』と言ってもらえると前向きになれたから、私も共感したい」と、事後の活動においても互いのよさを認め、支え合う感想が多く見られた。

③ 考察

事後の活動として、帰りの学活で1日の自分の行動をスキルのポイントごとに振り返り、端末に自己評価及び相互評価を入力した。授業で学習したことが実際の生活で生かされることを実感したため、児童は必要感をもって取り組めた。また、事前の活動、本時の活動での学習内容が身に付いているので、児童の考え方が広がり、掛ける言葉や相手を認める言葉等にバリエーションが増えた。帰りの学活で、端末に入力し、振り返ることで、「明日は、〇〇を意識しよう」「Aさんに共感してもらって嬉しかったからAさんみたいに共感しよう」等、課題を明確にして取り組む様子が見られた。また、恥ずかしさから、友達を褒めたり認めたりすることがなかなかできなかった児童が、端末では表出・発信できるようになり、事後の活動を継続して行うことで、対面でも伝えられるようになったことは、大きな変化である。普段、話す機会が少ない児童同士が、言葉を掛け合うこともあり、スキルの習得だけでなく、新しい人間関係を築くきっかけにもなっていた。事後の活動の最終日に振り返りを入力し、共有したことで、友達の取組を認めたり、自分の変化に気付いたりすることもできた。これらのことから、事後の活動を継続したことは、規律あるあたたかい雰囲気を定着させるために有効であったと考えられる。

2 事前の活動で実態に基づいたSST、本時の活動で実態に基づいたSGEを関連付け、事後の活動で継続して取り組み、定着を図ることを1人1台端末を併用して取り組んだことは、児童が互いのよさを認め、支え合うために有効であったか。

(1) C&Sより

① 実践前後に行ったC & Sの結果及び抽出児の変容

ア 第1学年
【分布5】→
【分布2】

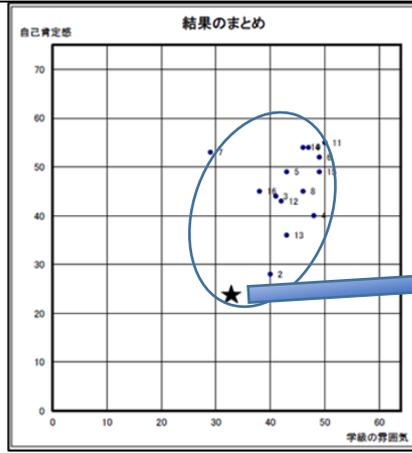


図10 C&S 6月分布 ★抽出児

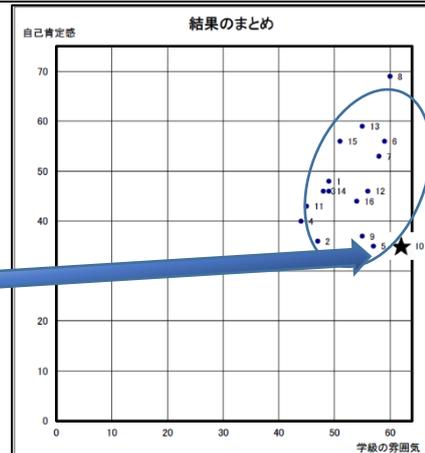


図11 C&S 11月分布 ★抽出児

学級の雰囲気にとまどまりが出てきた分布になった。特に「このクラスでは、クラスでの話し合いの中で、いろいろなアイデアが出されます」という質問に対して、平均値が5ポイント中3.40から4.44と1ポイント以上高くなった。SGEの実践で友達の考えを「上手な話の聞き方」のポイントを使って聞いたり、「あたたかい言葉掛けの仕方」を身に付けたりしたことで、思っていることを伝えられる児童が増えたからだと考えられる。抽出児★は、自己肯定感が低く、友達にきつい言葉を使う場面が多く見られたが、実践①の「上手な話の聞き方」や実践③の「あたたかい言葉掛け」を通して、友達の話をうなずいて聞くようになったり、自分から「ありがとう」と言ったりする場面が見られるようになった（図10、11）。しかし、自己肯定感は、まだ低いので引き続き、言葉を掛けて見守っていくことで、よりよくなると考えられる。

イ 第4学年
【分布2】→
【分布3】

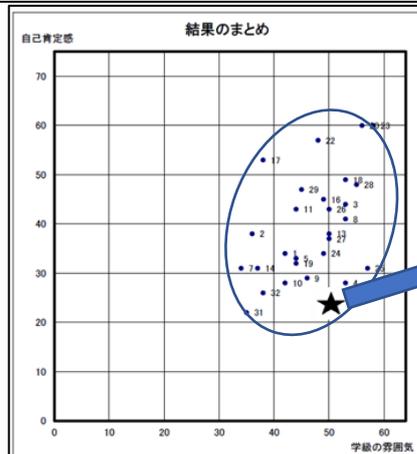


図12 C&S 6月分布 ★抽出児

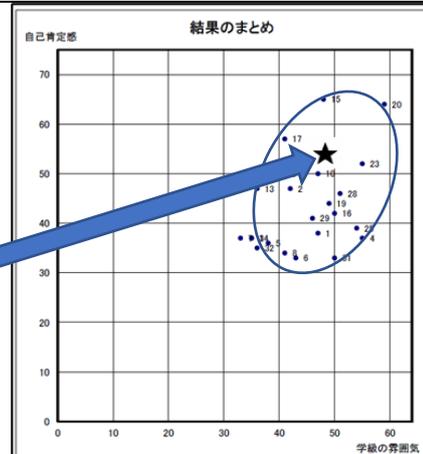


図13 C&S 11月分布 ★抽出児

全体的に右上に移行し、プロットの分布も実践前に比べ、まとまった。教師の影響を受けやすい実態だったので、教師による言葉掛けをより意識し、手本となる児童を褒めたり、振り返りで意図的指名をしたり、気になる児童に意識的に言葉を掛けた。実態に基づいた活動を3回行ったことで、学習内容をしっかりと理解でき、学校生活に生かそうとする気持ちが児童の振り返りから見られた。学級の雰囲気は、多くの質問項目で高くなっているが、特に「このクラスでは、クラスでの活動について自分たちで決め実行します」は、6月は3.43だったが11月は4.04と高くなった。抽出児★は自己肯定感が低く、実践前アンケートでは、「友達から褒められたことがないから、自分にはよいところがない」と答えていた。実践後、抽出児★は自己肯定感の値が25→55と高くなった。友達から認められたり、自分の考えを安心して伝えられるようになったりしたことで自己肯定感が高くなったと考えられる（図12、13）。担任からの聞き取りでも、「自分は、褒められたことがない、褒められるところがないという自己肯定感が大変低い児童が、友達から認められたことで、少し自信がもてて、授業で発言したり、『先生、手伝います』と言ったりするようになった」という回答を得ている。

ウ 第6学年
【分布2】→
【分布2】

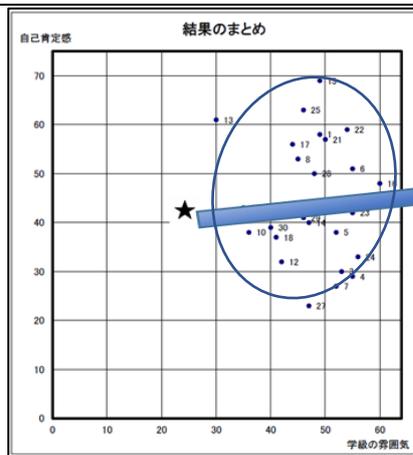


図14 C&S 6月分布 ★抽出児

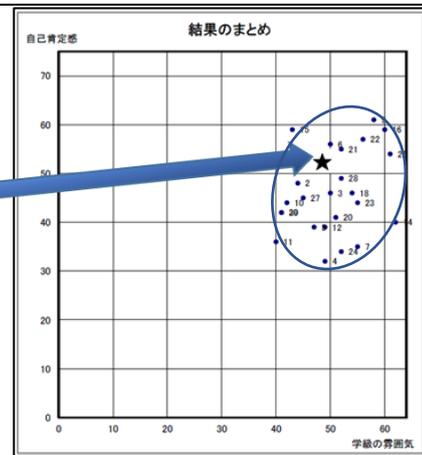


図15 C&S 11月分布 ★抽出児

分布は変わらないが、プロットの分布が右上に集まっており、学級としてのまとまりが見られるようになった。自己肯定感の質問、「私は、クラスのみんなの前では、大変話しにくいです」を、6月は「あてはまる」と回答した児童が3名いたが、11月は0名になった。実践を通して、相手の話を共感して聞き、認め合う雰囲気が育ったので、安心して話せるようになったと考えられる。担任からの聞き取りでも、「友達の意見を受け止めようとする児童が増えた。まずは、聞こうという意識が見られるようになった。答えのない、自分の考えを自由に言え、それでいて、それぞれに考え方が違うということを知ること、友達を大切にしようという心が育った」という回答を得ている。抽出児★は、学級の雰囲気、自己肯定感が低かったが、「ブレインストーミング」や「無人島SOS」では、友達の考えを肯定的に受け止める発言が聞かれた。「無人島SOS」では、条件に合わない考えを伝える児童に対して、「そういう考えができたらいいいね。でもちょっと難しいかもしれないね。」と伝えていた(図14、15)。

② 考察

3学級のC&Sの実践前後の結果を比較すると、3学級ともプロットが右上に移動し、プロットにまとまりが出た結果が得られた。抽出児も自己肯定感、学級の雰囲気共に概ね高くなった。このように、友達のよさを認めたり、自分から友達に関わったりして支え合う様子が見られたことから、事前の活動で実態に基づいたSST、本時の活動で実態に基づいたSGE、事後の活動で継続して取り組み、定着を図ることを関連付けて1人1台端末を併用して取り組んだことは、児童が互いのよさを認め、支え合うために有効であったと考えられる。

(2) ソーシャルスキル尺度調査より

① ソーシャルスキル尺度調査の結果

3学級とも、かかわりのスキル、配慮のスキル共に実践前より平均値が高くなった。第4学年では、かかわり、配慮のスキル共に6月は、

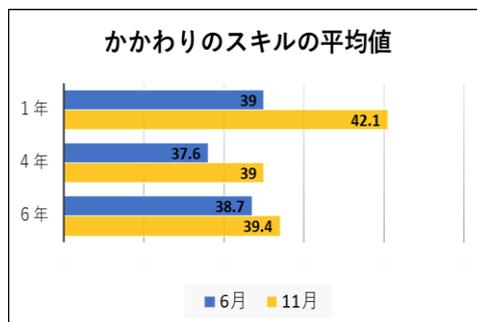


図16 かかわりのスキルの平均値の変化

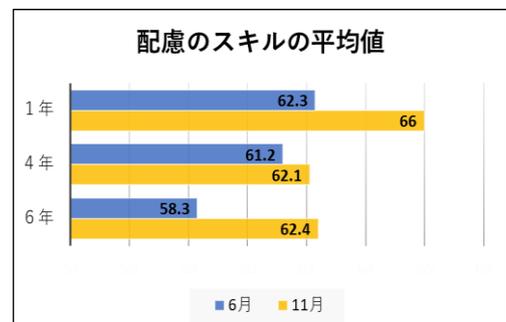


図17 配慮のスキルの平均値の変化

平均値以下の児童が20~30%いたが、11月は、両スキル共に平均値以下の児童が10~18%に減少した。「6友達が何かをうまくしたとき、褒めていますか」や「7友達の気持ちを考えながら話をしていますか」の質問に対して、3学級の96.3%の児童が「いつもしている、時々している」と回答している。また、「21友達が元気がないとき、はげましていますか。」に対して93.6%の児童が「いつもしている、時々している」と回答している。実践を通して友達を認め、支え合う気持ちが育ったからだと考えら

れる。また、「15自分だけ意見が違っても、自分の意見を言っていますか」については、「いつもしている、時々している」と回答している児童が実践前の70.4%から81.3%と高くなっている。第6学年が、67%から80%に高まったのは、実践で「私の価値観」や「ブレインストーミング」を行い、それぞれ考え方が違うことや友達の考えを認め合う経験をしたからだと考えられる。

② 考察

実践前後のソーシャル尺度調査の結果を比較すると、かかわり、配慮のスキルともに平均値が高くなった。第1学年が、かかわり及び配慮のスキルが大幅に伸びているのは、「上手な話の聞き方」や「あいさつの仕方」を継続して実践することで規律ある雰囲気や育まれたからだと言える。また、「あたたかい言葉掛けの仕方」で友達のよいところを伝え合い、褒めたり認められたりしたことであたたかい雰囲気が育まれたからだと考えられる。自分のことだけではなく、相手のことを考えられるようになった結果であると捉えることができる(前ページ図16、17)。これらのことから、事前の活動で実態に基づいたSST、本時の活動で実態に基づいたSGEを関連付けて行い、事後の活動で継続して取り組み、定着を図ることを関連付け、1人1台端末を併用して取り組んだことは、児童が互いのよさを認め、支え合うために有効であったと考えられる。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 客観的児童理解を行い、教師の日常観察を加えて把握した集団と個の実態に基づいて、本プログラムを教師が活用することで、規律あるあたたかい雰囲気が育まれた。
- 1人1台端末を併用し、考えを表出・発信したり、双方向のやり取りを行ったりしたことで、一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童の育成が図られた。

2 課題

- 集団の支援を効果的に行うために、本プログラムを年間指導計画に位置付け、計画的に実施し、見直し、SSTやSGEの内容が充実するように、学級の実態に基づいて改善を図っていく。
- 個別の支援を効果的に行えるように、具体的な言葉掛けの仕方等を例示したり、「1人1台端末併用学級活動プログラム」をより多くの場面で活用したりするなど、改善を図っていく。

VII 提言

一人一人が互いのよさを認め、支え合う児童を育成するためには、教師の日常観察とともに質問紙等による客観的児童理解に基づいた援助・支援が大切である。さらに、実態に基づいた援助・支援では、1人1台端末のよさを組み合わせ、使用する場面を工夫して、活用していくことが重要である。

<参考文献>

- 1) 大友秀人編著(2021) 『タブレットでふれあうエンカウンター』 図書文化
- 2) 河村茂雄監修(2001) 『グループ体験による学級育成プログラム小学校編』 図書文化
- 3) 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著(2007) 『学級ソーシャルスキル小学校低・中・高学年』 図書文化
- 4) 河村茂雄編著(2001) 『タイプ別!学級育成プログラム 小学校編』 図書文化

<担当指導主事>

田所 由美子 山田 雅之